

昔むかし、あるところに、ひとりの商人がいました。

商人は、旅に出て、ある村の宿屋に泊まりました。宿屋には、メツテという名前のおしやべりな娘がいました。メツテと商人は気が合つて、楽しく過ごしました。

朝になつて出かけるときに、商人はメツテにいました。

「帰ってきたら結婚しよう。ただし、そのことをだれにもいわないで、黙っていればだ
けだね」

「もちろん、黙っていられますとも」と、メツテはいいました。

商人が行つてしまうと、メツテは、朝ごはんの用意を始めました。

メツテは、小麦粉をひとにぎりつかもうとして、まちがえて灰をつかんでしまいました。母親がそれを見て、

「おまえ、まちがえてるよ。それ、灰じゃないか」といいました。メツテは、

「あら、考え事をしたもんだから」と答えました。母親は、

「きつと何かいいことを考えてたんだろ」とききました。

「ええ、そうなの。ゆうべ泊まった人が、帰ってきたら結婚しようつていったのよ。ただし、あたしが黙っていればですつて」

「おまえ、きつと黙っていられるよ」と、母親はいいました。

メツテは、テーブルのところへ行つて、いつもふせてあるお皿を表に返しました。母親は、オートミールを運んできて、お皿を裏返して、その上からオートミールをそそぎはじめました。そこへ、父親が入つてきて、びっくりしていいました。

「おまえ、なんてばかげたことしてるんだ」

「あら、考え事をしたもんだから」と、母親は答えました。

「きつと、なにか大切なことを考えてたんだろ」

「ええ、そうなの。ゆうべ泊まったあの商人が、うちのメツテに、帰ってきたら結婚しようつていったのよ。ただし、メツテが黙っていればですけどね」

「じゃあ、黙っていよう。そんなこと、わけないさ」

朝ごはんがすむと、父親は、畑へ出かけていきました。そして、まちがえて、すきの後ろに牛をつなごうとしました。となりの男がそれを見て、

「おまえ、それじゃ逆だよ。なんてばかげたことしてるんだ」といいました。

「おやおや、考え事をしたもんだから」

「きつと、何かめつたにないいいことを考えてたんだろ」

「そうなんだ。ゆうべうちに泊まった商人が、うちのメツテに、帰ってきたら結婚しようっていったのさ。このことを黙っていればだがね」

となりの男は、

「おまえさんたち、ちゃんと黙っていられるよ」といいました。

こうして、この話は、いたるところに広まっていきました。村の人たちは、商人が帰ってきたらメツテに結婚しようといったこと、ただし、黙っていられればの話だということ語り合いました。

やがて商人はもどつてきましたが、村に着く何マイルも前から、道行く人に、「おめでとう」「おめでと」と、声をかけられました。メツテが黙っていられなかったことが分かって、商人は腹を立てました。

商人は、メツテの家には行かずに、となりの家に泊まりました。となりの家にも娘がひとりありました。商人は、この娘と結婚することになりました。

結婚式の日、メツテは、教会へ結婚の贈り物を持って行きました。そして、花婿をふり向いて、そつといいました。

「あたしは、いまでも望みを捨てていません」

その晩、花嫁が、商人にきました。

「メツテはあの時、何ていったの」

商人は、

「まだ望みを捨ててないんだとき。あのあわれなおしやべりメツテめ」といいました。すると、花嫁は、笑っていました。

「メツテは、生まれてこのかた、ずうっとおしやべりだったわ。そこへいくと、あたしは口が堅い^{かた}のよ。あたし、子どもを三人産んでね、三人ともうちの大きな木の下に埋めちゃったの。でも、このことを誰^{だれ}にもいったことないわ。あなたにだけよ」

商人は、飛び上がっていました。

「ぼくはやっぱりメツテと結婚するよ。あのこは、いいことを黙っていられないくらいだから、悪いことはもつと黙っていられないだろう」

夜が明けると、商人は役所に行つてこの話をしました。となりの娘は罰せられ、メツ
テは商人と結婚しましたとき。
おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話3 北欧』 櫛田照男訳／ぎょうせい